

## 第2節 城郭史上の加越国境城郭群

千田嘉博（奈良大学）

はじめに

1584年（天正12）、尾張から伊勢・伊賀を戦場にして、織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉が、織田信長の後継者をめぐって戦った（小牧・長久手の戦い）。この戦いでは両軍が各地の大名を味方にするため大規模な情報戦を行った。その結果、越中の佐々成政は、織田・徳川軍に呼応して前田利家領に侵攻し、加越・能登の利家の城郭を攻撃した。利家の適確な援軍によって成政は城を攻め落とせなかったが、翌1585年8月に羽柴秀吉が越中に攻め入り成政が富山城で降伏するまで、加越国境にある城郭群で、佐々・前田両軍が対峙することになった。

加越国境城郭群で両軍が対峙し、城郭を整備した時期は、わが国において中世城郭から近世城郭への大きな変化の時期であった。しかも近世城郭は織田信長、豊臣（羽柴）秀吉による天下統一の展開に対応して、信長・秀吉スタイル城郭（織豊系城郭）の全国展開というかたちで進んだ。各地に残る戦国・織豊期城郭はいずれも貴重であるが、信長のもとで最先端の城づくりを会得していた佐々成政、前田利家が具体的にどのような城を築き得たのかをつかむことは、わが国の近世城郭の成立過程を実証的に知る上で、きわめて重要である。とりわけ加越国境城郭群は1584-85年という限られた時期に今日見る最終的な改修を集中的に行ったことが明らかで、城郭プランの変遷を把握する標識遺跡となるものである。本稿では、そうした視点から調査が進んだ切山城、松根城の城郭史上の位置づけを検討したい。

### 1. 切山城

切山城の主郭Ⅰは周囲に土塁をめぐらしており、北東と西に出入口を開いた。城のかたちから北東に開いた出入口が大手筋と考えられる。発掘の結果、柱間2,3mの礎石建ちの城門が検出された。掘立柱建物ではなく、礎石建ちの城門であったことは、当該期の城郭建築を考える上で特徴的である。どのような城門建築であったかは、慎重に考えるべきであるが、門扉を吊った鏡柱の柱間が先述のように2,3mであり、左右開きの一般的な門扉であったと推測すると、1枚の門扉が1mほどとなり、かなり小さかったことになる。

切山城よりわずかに時期は下るが、文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）に際して築かれた肥前名護屋城と周囲の陣を描いた「肥前名護屋図」によれば、多くの陣の門に突き上げ戸を用いたことがわかる。突き上げ戸であったとすると、城外側へ門扉を突き上げたことになる。だからこの構造であれば、城内側から門扉を押し上げるのは容易であっても、城外側から門扉を引き上げるのは難しく、城門としても合理的であった。また現存する兵庫県姫路城「水一門」のように、片開きの門扉であった可能性も十分考えられる。いずれにせよ発掘で明らかになった城門の鏡柱の柱間から考えて、切山城主郭の大手門は、突き上げ戸あるいは片開きの門扉を備えた城門であったと復元すべきであろう。将来的には平面表示や立体復元によって、市民が城郭構造を実感できることを期待したい。

この主郭Ⅰ北東の出入口を出た先は、堀で狭められた土橋になり、土橋の先に矩形の曲輪Aがある。もともとは尾根筋上の主郭につづく曲輪のひとつであったと思われるが、最終的には馬出的な機能を果たした特別な出入口空間になっていたと考えられる。とりわけ曲輪Aから南東側の主郭帯曲輪につづく土橋状のスロープが認められ、その土橋状のスロープの北側に堀を添えたことで、このスロープを城道として明確化していた点は重要で、曲輪Aが実質的な馬出しへと変化した証拠である。現状ではこの南東のスロープ以外に外部へ接続した出入口は見当たらない。しかし曲輪A西側の帯曲輪を経由して、城域北側にも

西側にも連絡したと思われる。つまり曲輪Aは、主郭への城道を集約した守りの要の役割を果たした空間だったと位置づけられる。

ただし定型的な馬出しが、馬出しの周囲に堀をめぐらしたのに対し、切山城の曲輪Aは、実質的な馬出しとして機能しながら、定型的な形態をとらず、過渡的な様相を示している。加越国境城郭群に先立つ1583年（天正11）の賤ヶ岳の戦いで築かれた玄蕃尾城（滋賀県）に、やはり過渡的な馬出しが認められること、後述する松根城が過渡的な馬出しを備えたことから考えて、天正11・12年前後に織豊系城郭の馬出しが成立していったことが確実である。

主郭Ⅰ西側の出入口は主郭から一段低くなった小さな腰曲輪を経由して屈曲して進んだ。この小さな平場Bは単純な段でない。小さな平場の外側には土塁をめぐらし、主郭側から城道が直角に屈曲して通るように設計しており、外柵形と評価すべきである。外柵形は織田信長の岐阜城（岐阜県）、安土城（滋賀県）で発達し、織豊系城郭を特色づけた出入口形式で、熊本城（熊本県）、江戸城（東京都）をはじめとして、各地の近世城郭に受け継がれた。

外柵形Bの西側正面には曲輪Ⅱの出入口Cがあった。この出入口Cは城内側から見て北側から南側に屈曲してふたたび北側に向かって土橋に降りた。そして堀切りを土橋で渡った先には、北側から伸びた土塁を設けて、その土塁と堀切りとを組み合わせで城道を、さらに屈曲させた出入口Dがあった。出入口Dは小規模ではあるが明確な外柵形と評価できる。つまり外柵形Bから出た城道上に、出入口Cを挟んで、もうひとつの外柵形Dを備えて、外柵形の連続帯を設けていたのである。

外柵形Bは南側から土塁を出して北側で開口したから、主郭Ⅰ側から見れば城道は右折れ→左折れとなった。それに対して外柵形Dは、城内側から見て左折れ→右折れの順に曲がって出ることになり、ふたつの出入口が対の関係になっていたと理解できる。のちの熊本城などの近世城郭では、外柵形の連続体をより明確に築いたが、切山城の連続外柵形は、近世城郭へつづく外柵形の指向性を、すでにはっきりと示している。この点もきわめて重要な発見である。

土づくりの軍事的な砦であった切山城と、石垣づくりの政治拠点としての近世城郭を比較するのはいかにかという批判はあり得るだろう。しかし織豊期の軍事的な砦であっても、近世城郭であっても、城として果たすべき軍事機能は通底しており、また近世城郭の軍事機能を担保した出入口などの軍事性は、織豊期の城郭に直接由来した。だから実際の城郭跡で両者のつながりを実証的に把握するのが必要なのであって、それは城跡の考古学的研究でなければならない。もちろん砦と居城ではさまざまな違いがあった。しかし文献史学にもとづいた政治史的な視点にもとづいて、居城と砦とを比較すべきではないと考えたのでは、城跡を物質資料として研究する独自性を狭めてしまうだけでなく、分析の立脚点そのものを文献史学に委ねてしまうことになる。そうした言説には十分な注意が必要だろう。

切山城が小原越道を本来、城内に引き込んでいたことが判明したことも、意義のある発見であった。通過するためには切山城を攻め落とすしか方法はなく、切山城が砦であったとともに、いわば関所としても機能したことが明らかになったからである。いわば究極の街道封鎖であった。主郭Ⅰ・曲輪Ⅱなどによる主要部を中心に、尾根上に広大な曲輪群が広がっていたが、曲輪群の先端は堀切りで明確に遮断しており、途中に削平が不十分な緩斜面を含んでいても、全体を切山城の外郭と捉えなくてはならない。

こうした外郭は一般的に戦闘時の軍勢駐屯地として機能した。そして街道を遮断した切山城では、街道を物理的に封鎖した空間としても機能したことが測量と発掘調査から明らかにされた。つまり加越国境城郭群が1584—85年に使われた城郭と街道封鎖による佐々・前田両軍による陣地戦という歴史的な状況を、鮮やかに反映した城郭遺構と評価されるのである。このような特徴を備えた城跡は全国的にも珍しく、その点からも加越国境城郭群の歴史的価値は高いといえる。

## 2. 松根城

松根城は規模が大きく、また全域にわたってきわめて技巧的で、当該期の城郭プランを考える上で、文字通り標識となるべき城跡である。松根城の曲輪群はこれほどの高所に築いたにもかかわらず横堀で囲んでおり、土づくりの城としては最上の防御を意図したことが明らかである。特に注目されるのは出入口の構造で、主郭Ⅰの南には過渡的な馬出しを、北側には出入口空間と堀切り・土橋を挟んで城道を屈曲させた土塁を設けた外柵形Ⅰを設けた。

曲輪Ⅱの南には外柵形Ⅱが認められる。外柵形Ⅱは、林道の建設もしくは公園化によって、馬出しⅠとともに若干の改変を受けている。しかし、基本的に馬出しⅠ・外柵形Ⅱとも、同様の意図のもとにつくったと考えられ、出入口（城門）と組み合わせた特別な出入口空間（空地）を組み合わせ、それを經由して、それぞれ主郭Ⅰあるいは曲輪Ⅱに入るようにしたものと分析できる。

つまり主要な曲輪の出入口に特別な出入口空間（虎口空間）を設けたという一貫性を認められる。しかし、いずれの出入口空間も、定型的な馬出しや外柵形とはいいい難く、多分に折衷的である。織豊系城郭では、岐阜城、安土城で明らかなように外柵形系のくい違い出入口、外柵形が先に発達し、切山城で見たような馬出し系の出入口は遅れて出現した。松根城主要部の出入口は、外柵形系の知識を基礎にしながら、そこから馬出しが分離・出現していく過程を、みごとに物語る希有な遺構である。特筆すべき特徴といえよう。

曲輪Ⅲから南東に出た出入口は、堀切りを土橋で渡り、その先の広場に入って、90度直角に城道が屈曲して、外へとつづくという馬出しの要件をより整えた形態を示した。しかし曲輪Ⅲと馬出しⅡとの間の土橋幅が太く、出入口空間がそのまま外側に突出するという馬出しⅠに共通する初期要素（馬出しⅠは、後方の曲輪、つまりここでは主郭Ⅰと出入口空間とを分離する堀切りがなく、単純に出入口空間が前方に突出した）を見せた。同様の様相は主郭Ⅰ北側の外柵形Ⅰとも共通し、ここでも堀切りを渡る土橋の幅が異様に広い。その後の近世城郭では、堀切りの外側に突出した出入口空間を堀切りで切断して分離するように発達した。しかし松根城では可能な限り出撃と守りの拠点であった出入口空間を前方に進めながら、その後方分離を明確にしきれていないという、馬出し成立の過渡期にのみに表れたきわめて微妙な構造をもっていた。

また馬出し空間が完全に堀で囲まれておらず、城外側への出入口であった南西部は曲輪の段差でつながったことも、玄蕃尾城の馬出しと共通した定型的馬出し成立の前段階を示す特徴であった。このように松根城の出入口を分析していくと、織豊系城郭のなかで馬出しの成立過程を明確に追うことができることがわかる。つまり織豊系城郭において、まさに加越国境城郭群が最終的に改修された時期に、外柵形を基礎にして馬出しが成立していったと評価できる。ところが関東の北条氏あるいは甲斐の武田氏が、戦国・織豊期に馬出しを用いたことが古くから知られており、織豊系城郭に見られ、近世城郭に受け継がれた馬出しは、北条氏や武田氏の馬出しを取り入れたものという説がしばしば説かれてきた。しかし、このように織豊系城郭において独自の馬出しの成立過程をたどることができるので、近世城郭が普遍的に用いた馬出しも、東国の北条氏や武田氏の技術系譜を取り入れたものではなく、織豊系城郭そのものに発したものと位置づけなくてはならない。

松根城でも、小原越の街道を城域にもともと取り込んでおり、最終的には街道を大規模な堀切りで遮断して通行を封鎖したことが測量と発掘で明らかにされた。街道の封鎖は城域の西端の堀切りによって実行しており、この城の最終的な改修が佐々成政側によってされたことを示唆する。それは文字史料からの推測とも合致する。



## まとめ

加越国境城郭群のうち、調査が進んだ切山城と松根城を中心に城郭としての特徴と、城郭史上の位置づけを検討してきた。この結果、両城が当該期の城郭の標識遺跡としてきわめて重要な位置を占めただけでなく、織豊期城郭と江戸時代の大名の居城として成立した近世城郭とをつないで理解するための、ミッシングリンクをつなぐ特別な城郭群であることを指摘した。

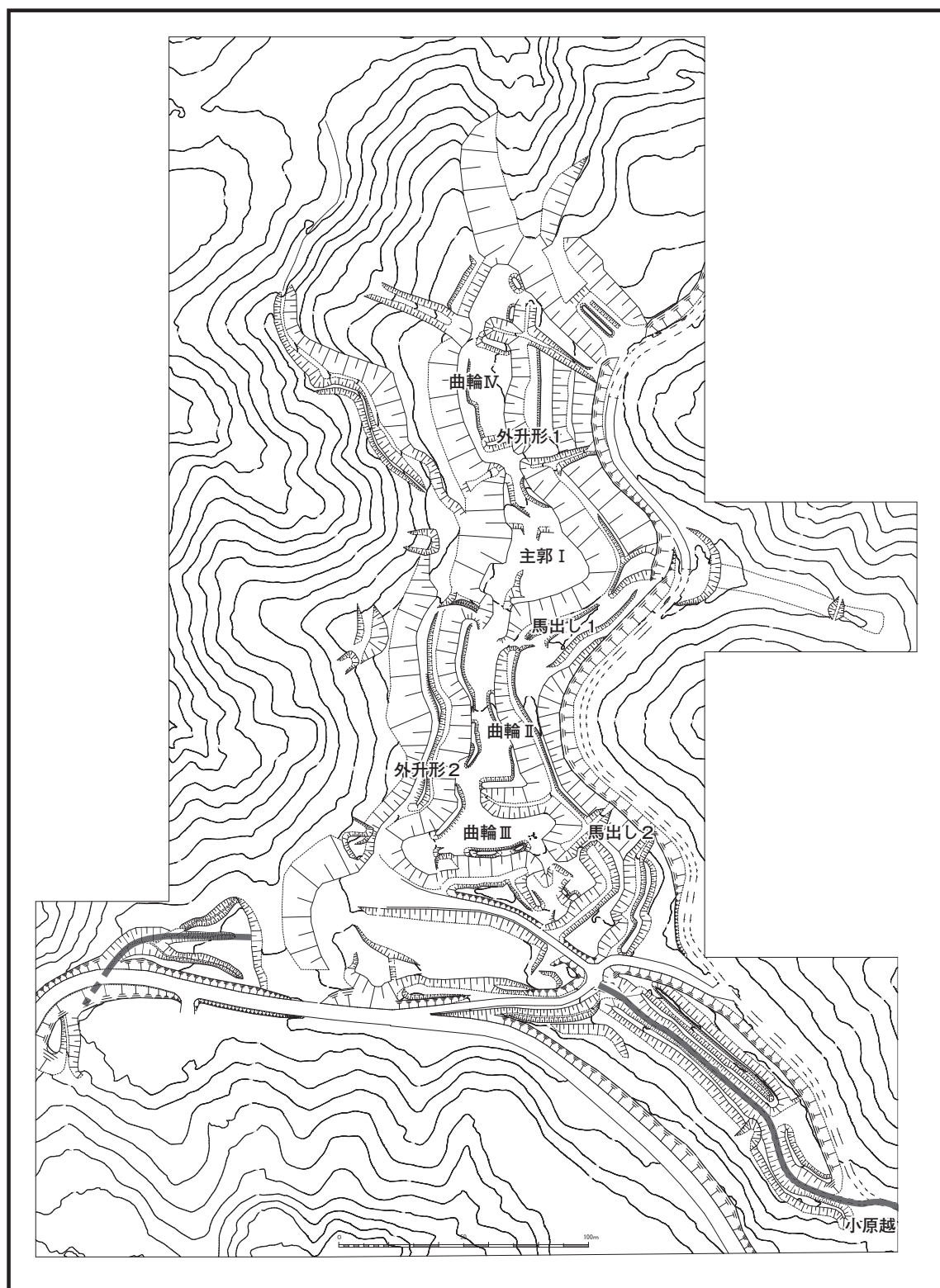
とりわけ外柵形や馬出しという、わが国の近世城郭が普遍的に用い、また地球上に人類が築いたさまざまな時代と地域の城が普遍的に備えた出入口プランの成立過程を、明確に物語る城郭群であることは特筆すべき歴史的価値である。外柵形も馬出しも、世界の城郭で認められる。たとえばイギリスの紀元前4世紀から紀元前1世紀頃に築いた鉄器時代の城塞都市・ヒルフォートには、外柵形を用いたデンプリーや、馬出しを用いたメイドゥンカッスルがあった。また中世のロンドン塔は、みごとな半円形の馬出しを持ち、フランスのカーン城は石造りの四角い馬出しを複数備えた。

このように外柵形や馬出しは、人類史上の城郭が、高度な発展段階に到達したことを示す指標であり、人類が到達したもっとも合理的に防御と出撃の機能を発揮し得た普遍性をもった出入口プランであった。そうした世界史的な視点に立つとき、切山城と松根城が代表する加越国境城郭群がもつ歴史的価値は、佐々成政と前田利家との戦いを物語る遺跡という日本史上の意味に留まらず、日本の城郭がいかに人類史上の普遍性を持ち得たかを証明するものと位置づけなくてはならない。筆者は主要な加越国境城郭群を踏査しているが、切山城、松根城以外の城郭群も規模や構造で劣るものではなく、2つの城だけでなく、城郭群全体の保護と活用を検討することが必要であろう。今後の取り組みが期待される。

また今回の調査では、城郭遺構だけでなく街道と合わせた測量や発掘を行った。金沢市のこうした調査方針はまことに適確で、街道を取り込んで封鎖していった、まさに加越国境城郭群が戦いのなかで果たした機能に合致した特異な構造を実証的に解明した。将来、城跡だけでなく街道と合わせて、いかに特色ある保護と整備を実現していくか、積極的な取り組みを期待したい。



第45図 切山城遺構説明図



第46図 松根城遺構説明図